

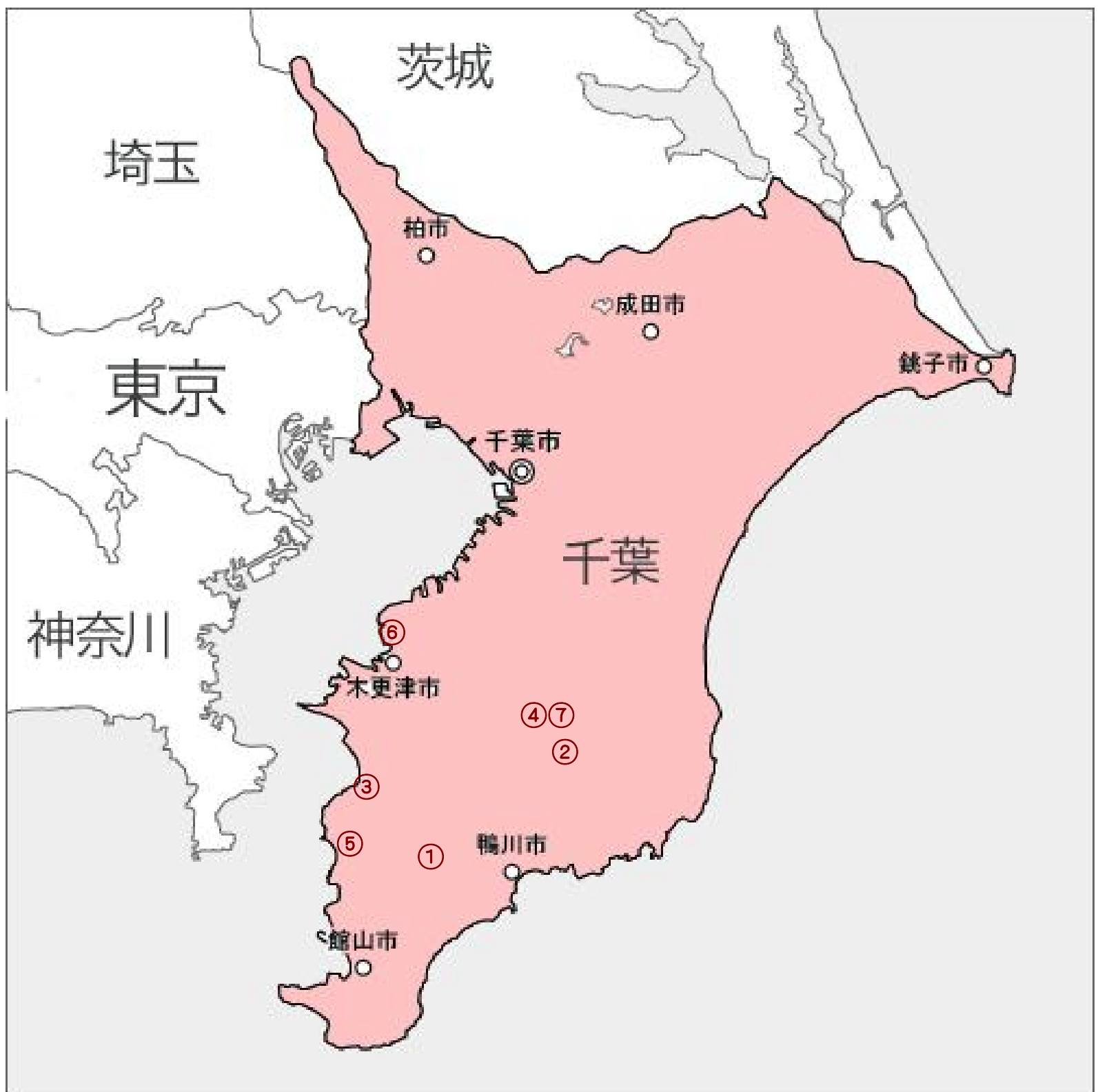
「三度目の房総」

江川・久津間海岸

2017年6月



著者：梶原正範
mail:hanadayori@okinawa.zaqq.jp
<http://hanadayori.html.xdomain.jp>



【千葉房総探索マップ】

- ① 大山千枚田
- ② 向山・共栄トンネル
- ③ 燈籠坂大師の切通し
- ④ いちはらクオードの森
- ⑤ 保田小学校
- ⑥ 江川・久津間海岸
- ⑦ 地磁気逆転層





「大山千枚田」

今年3月に千葉房総を訪れてから、その多様性の魅力に嵌(はま)り、三度目の房総探索となりました。

最初にやって来たのは「大山千枚田」、房総の山奥にある階段状の田んぼです。空模様は生憎の小雨、前日の6月7日には関東甲信で梅雨入りが発表されたばかりのタイミングの悪さです。しかしながら棚田にとっては恵みの雨。ここには灌漑用の溜池や井戸があるわけではなく、田んぼの水はその土地に降る雨だけで賄(まかな)われる、いわゆる天水田らしいのです。

コーヒーでも頂こうと「棚田倶楽部」に入ってみれば、喫茶・飲食関係の営業は[古民家レストラン「ごんべい」](#)に移ったとのこと。さっそく向かってみれば、手前には農機具の倉庫もあって見た目は普通の農家です。

看板の案内どおり右側の食堂入り口から中に入ってみれば、真新しいテーブル席とその奥には厨房がありました。厨房の中はおじさんとおばさんの二人、お客はだれもいません。試しに「母屋の方を利用してもいいですか。」と尋ねれば、「自分で食事を運んでくれればいいですよ。」とややしぶしぶ承諾してくれました。

母屋へは、正面の玄関から入ります。玄関を上がると正面に仏壇と神棚のある座敷があって、右奥の部屋に床の間があり、そこが客間ようです。周囲には廊下が巡らされていて、開放的な作りです。梁や障子戸は古い民家の部材をそのまま使っているようですが、基本的には新築です。

注文したのは千枚田米麺(べいめん)、千枚田で取れた米粉で作ったうどんです。米麺は、注文を受けてから粉を練るのだそうで、ひき肉を作る時のような練機(ミンサー)で麺を作り始めました。

千枚田米めんが出来上がってきました。米粉を使った麺といえばベトナムのフォーが有名ですが、同じように柔らかい食感かと思えば、予想以上に腰があり「つるっ」としています。ここで使う食材は、野菜はもちろん味噌や醤油なども、ここで収穫し加工したもので、他所(よそ)からもってくるのはかつお節だけだと笑いながら教えてくれました。



「たんぽぽ珈琲」

食後は、雨が止むまで「たんぽぽ珈琲」でまったりしようと思います。これはタンポポの根を煎じて作るのだということで、これも近くに生えているたんぽぽで作るのだろうかと考えながら頂きます。普通の珈琲と比べると薄い味なのですが、別の飲み物だと思えば十分美味しくいただけます。

今はちょうど田植えが済んだ時期、ここは、秋になったら黄金の稲穂を見に来なくてはいいかなと思える、人間が自然に回帰できる心の故郷(ふるさと)のような場所でした。

日本全国 あちこち探索

(「向山・共栄トンネル」と「燈籠坂大師の切通し」)



向山(上)・共栄(下)トンネル

続いて探索するのは手彫りのトンネル。40万年前まで房総半島は遠浅の海で、利根川から流れ出た砂や泥が堆積し固まった地層が隆起して今の房総半島ができました。この堆積岩はもろい為、道路や水路の建設で比較的容易にトンネルが掘れたということです。

面白いトンネルがあるのは養老溪谷温泉郷の[温泉旅館「川の家」](#)の目の前で、宿の公式ホームページにもその写真が掲載されています。

トンネルには2つの名前が付けられています。もともとのトンネルが「向山(むかはやま)トンネル」で、その後に西側の出口を下方向に掘り下げた為、新たに掘削した部分を「共栄トンネル」と云う様です。

したがって、昭和になって作った新しいトンネルは蒲鉾(かまぼこ)形ですが、上側の古いトンネルは、日本古来の伝統的な掘削工法である天井の尖った観音彫りになっています。

次に目指したのは「燈籠坂大師の切通しトンネル」です。養老溪谷から車で向かうには、房総の山々を横切りJR内房線上総湊駅付近で国道127号線に合流し、そこから4kmほど南下します。

到着してみれば、クラブツーリズムの日帰り観光バスが停まっています。そこで休憩していた運転手さんに、「ここは有名な観光地なんですか。」と尋ねてみれば、ここへきたのは初めとのこと。フェイスブックで突然メジャーとなった「濃溝の滝」に寄ってから来たのだと云うことでした。

車を止めた近くに小さなトンネルが口を開けていて、横に[「燈籠坂大師入口」](#)と刻まれた石の案内碑がありました。トンネルの向こうは鬱蒼とした森の中、「千と千尋の神隠し」で千尋が抱いたと同じような不安感を覚えます。

入り口のトンネルを抜けて右手を見れば、鎌倉釈迦堂口の切通しにも似たお目当てのトンネルが大きな口を開けています。壁面には砂岩泥岩互層(タービダイト)の縞模様にノミで削った跡がくっきり残されていて手彫り感満載です。あまりの圧倒的な存在感に、そのまま他所(よそ)の世界に吸い込まれてしまったような感覚を覚えます。

それにしても不思議なのは間口の形、弘法大師が立ち寄ったという燈籠坂大師の参道だけあって、なにか宗教的な意味合いを考えてしまいます。しかしながらじっくり形を観察してみれば、上の方の四角い部分が最初に彫ったトンネルで、後になって下に切り下げ工事を行ったことが分かります。

しばらくその場に佇(たたず)んでみると、ツーリング途中の若者などもポツリポツリと現れます。こここそは、ブレイク真近の隠れた名所に間違いありません。



燈籠坂大師の切通しトンネル



「いちはらクオードの森」

実を明かすと、燈籠坂大師の切通しに向かう前に立ち寄ったのが「いちはらクオードの森」、クオードの森神殿と呼ばれている素彫りトンネルがお目当てでした。ところで、「クオード」とは市原市を中心に展開している進学塾の通称で、市の管理する自然公園の命名権を取得したもののようです。

さっそく管理人のおじさんに「トンネルはどこにありますか？」とストレートに尋ねれば、公園案内を手渡して丁寧に教えてくれました。云われたとおり園路を歩いていくと、立派な手彫りトンネルがありました。このトンネルは二階建てになっていて、一階部分は水路、二階部分が通路という珍しい構造です。

トンネルを潜(くぐ)ると菖蒲田(しょうぶでん)が広がっていて、紫や白の菖蒲が満開です。菖蒲を綺麗に維持するのは大変で、咲き終わった花がらを一つ一つ摘んでいる最中でした。その奥には、もうひとつの手彫りトンネルが見えていて、ここは周囲を山に囲まれた谷になっています。

その先にもトンネルがあって、3つのトンネルが連なっています。この公園はほとんどが原野のままで、訪れる人たちも大きなカメラを抱えたバードウィッチャーがメインです。耳を澄ませば「ピーチョ・ピチョ」というキビタキの声も聞こえます。たまたま園内で出会った方は蝶が得意分野のようで、人によって専門が細かく分かれています。

何にでも感化されるのが自分の悪い癖、試しに近くを舞うオレンジ色の蝶々の撮影を試みますが、簡単には撮らせてくれません。後に昆虫図鑑で調べてみれば「ウラギンシジミ」(裏銀小灰蝶)という蝶々、名前のとおり裏地の白が特徴で、触覚先端にはオレンジ色の可愛いアクセントが付いています。

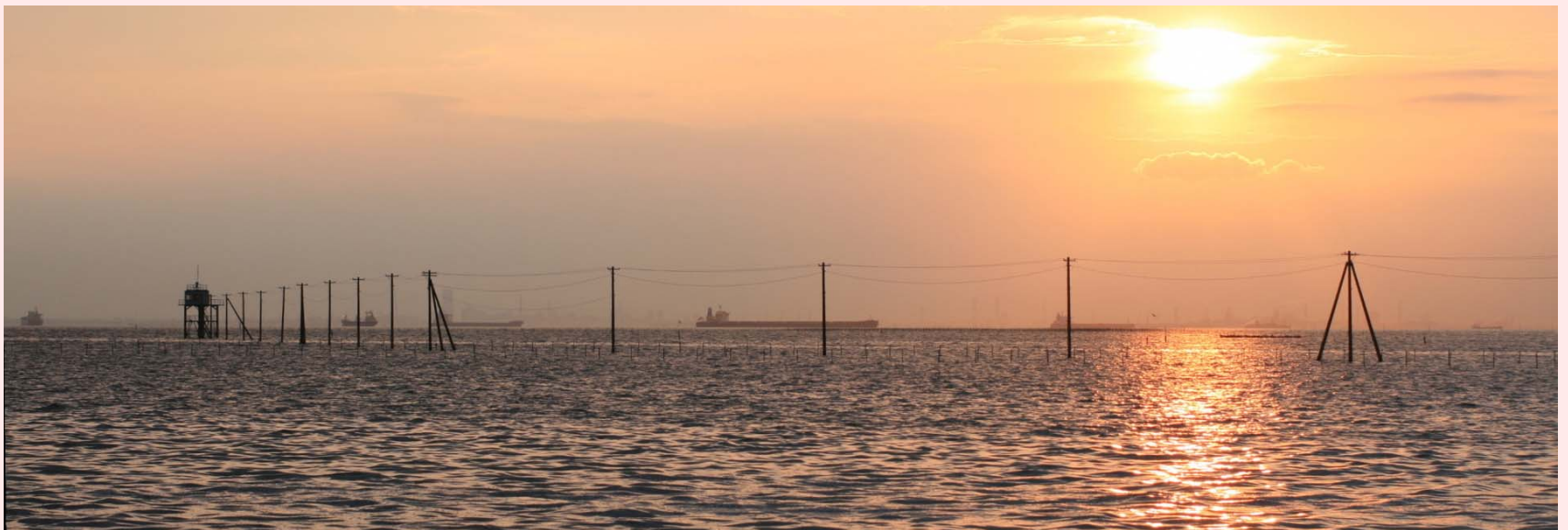
ところで、ここへやって来た所期の目的は素彫りのトンネル。クオードの森神殿と噂され、ミャンマーの鬱蒼としたジャングルの中をイメージしていましたが、ここはあまりに綺麗に整備されていて、描いていた雰囲気と異なります。帰ってからネットで調べてみれば、目指すトンネルは少し離れた林道沿いにありました。しかし、これを楽観的に捉えるなら、日を改めて再訪する楽しみが増えたと言えます。



「いちはらクオードの森」の菖蒲田



「ウラギンシジミ」(裏銀小灰蝶)



「江川・久津間海岸」

遅い昼食を撮(と)りに保田小学校に向かおうと思います。ところで「撮(と)る」は食物を摂取する時に使う字ですが、この読み方は常用漢字表外なので、代わりに「食事を取る」と書いても良いことになっているようです。他にも「とる」には、「撮る」「採る」「捕る」「盗る」「録る」などの漢字がありますが、これらをなんとなく使い分けられる日本人の教育レベルは本当に素晴らしいと思います。

一方、保田小学校は廃校となった学校で、後に道の駅として生まれ変わった施設です。行ってみれば広い駐車上はいっぱいで、その人気には驚かされます。施設の中をぐるっと回ってみれば、そのデザインは素晴らしく、黙っていれば小学校をリニューアルした建物とは気づきません。さらに、あえて子供たちの学んだ黒板や椅子を利用し大人たちの郷愁を誘うあたりは、完全に発案者や設計者らの作戦勝ちだろうと思います。



cafe 金次郎

昼食に入ったお店は「里山食堂」。子供たちの給食を再現した「保田小給食」は数量限定メニューで、とっくに売り切れでありました。

食後は、cafe金次郎に入ってコーヒーを頂きます。そこで気になったのが生メロンと濃厚ミルクソフト1,300円です。

生のマスクメロンを贅沢に半分使ったスイーツなのですが、限定5個と云うことはメロンが半分余ってしまいます。その半分の行方(ゆくえ)が気になって、今夜は眠れないかも知れません。

道の駅「保田小学校」を満喫した後は、江川・久津間海岸に向かいます。今日6月9日の日没は18時52分で、綺麗な夕日の時間を狙います。この海岸は、海に伸びる海中電柱が有名で、しかも撤去寸前と云う噂を聞きつけ慌ててやってきました。満潮時刻は17時36分、海に浮かぶ電柱の不思議な光景が見られる筈です。

現地には、日没の二時間前に着きました。ここには広い駐車場があり、この時期は潮干狩り客で賑わいます。しかしながらこの時間帯は満潮で、人影はわずか二人だけでした。

江川海岸の向こうに見える大きな工場群は、新日鐵の君津製鐵所です。夜ともなれば、工場の明かりが煌々(こうこう)と灯り、これが月明かりに照らされた光景は、夜景フェチならずとも堪(たま)らないだろうと思います。さらに風の無い凪(なぎ)の日には、海水面が鏡のようになるそうで、死ぬまでに見たい千葉の絶景！と云う人さえいるようです。

夕日を撮るなら隣接する久津間海岸、ここの電柱は西に向かって伸びていて、夕日をバックにした海中電柱が見られます。晴れた日には富士山の姿も望めるらしく、夜は夜で羽田に向かう飛行機の光を捉(とら)えることもでき、カメラマンにとっては写真の腕が試される多彩な顔を秘めた海岸でした。

【次回予告】地磁気逆転層

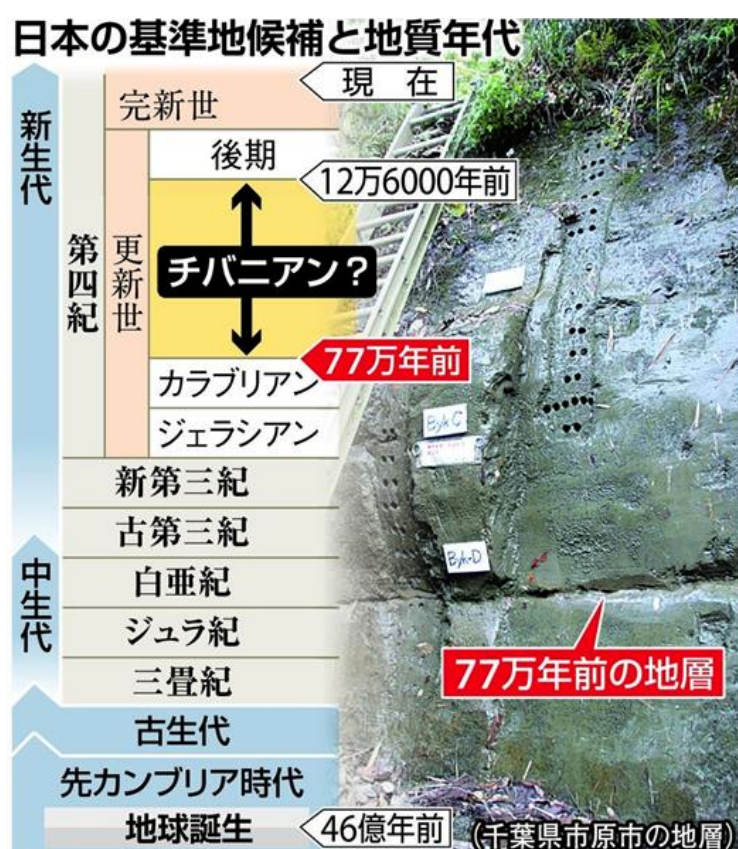
テレビのスイッチをひねると……あ、またやってしまった！ 「スイッチをひねる」や「チャンネルを回す」は、遠い昔に死語となっていて、今の子供たちには分かりません。

テレビのリモコンの赤い電源ボタンを押すとNHKのニュースをやっていて、養老溪谷にある古い地層を国際標準地として申請「する」とか「した」とか云う様な話をしています。

耳を澄まして良く聞いてみれば、その地層は77万年前のもので、その地層を境に地磁気の方法が逆転した証拠が確認できるということです。しかも、77万年前から12万年前の年代にはまだ名前が付けられておらず、ユネスコの機関である国際地質科学連合に「チバニアン」と云う名前で登録申請するという内容でした。

既に、この年代の名前を申請しているのはイタリアで、スクーデリア・フェラーリにマクラーレン・ホンダが戦いを挑んだような構図です。折も折、佐藤琢磨がインディ500で優勝を果たし凱旋帰国したばかり。この勢いで、日本が命名権を勝ち取ることを祈ります。

ところでこのニュースを聞いていると、そもそも「地磁気逆転ってなんだ？」から始まり、キツネにつままれたような地学的あるいは宇宙物理学的用語がどんどん出てきます。しかしながら、分からないなりに兎に角(とにかく)世界的に貴重な地層らしいので、今回はこの地層探索に決めました。



(2017.6.7産経ニュースより)



【大山千枚田】



【向山・共栄トンネル】



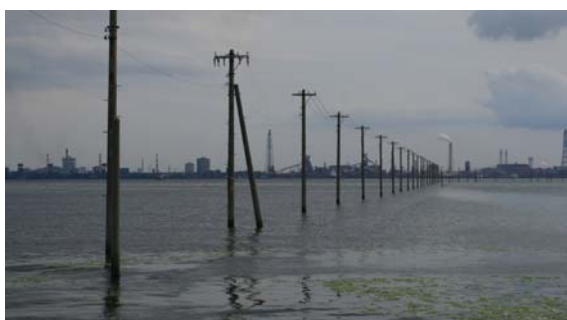
【燈籠坂大師の切通し】



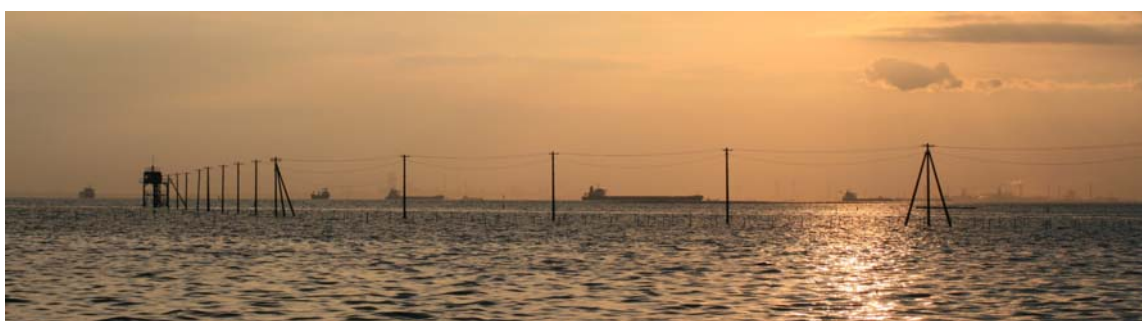
【いちばらくオードの森】



【保田小学校】



【江川・久津間海岸】



【三度目の房総】 2017年6月16日

著者：梶原正範

mail:hanadayori@okinawa.zaq.jp

http://hanadayori.html.xdomain.jp